

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

活動の系統化を図り、
ゴールを明確にした
学びを実現

自己探究から進路実現へ。 学年ごとにゴールを定め、 生徒の「できる」を増やしていく 大阪府立箕面東高校

生徒の 転換点

- スモールステップで学びが積み上がるよう、3年間の活動を系統化
- どんなに小さなことでも、生徒ができたことを「やるやる」と教師が価値づけ

自己PR文の作成をゴールに、 自分自身のことをつひとつ探究

基礎学力の育成や協働性の伸長などに力を入れる「大阪府・エンパワメントスクール」である大阪府立箕面東高校。2025年度から、「やるやる！みのひが」をキャッチコピーに、生徒が自分の将来を前向きに考えて行動するようになることをめざして進路指導の改善に取り組んでいる（P.2図1）。「産業社会と人間」と総合的な探究の時間で取り組む探究学習も、生徒が自己を探究する活動を軸とするカリキュラムに刷新した（P.2図2）。進路指導主事の吉田拓郎先生は次のように語る。

「以前の探究学習も自己探究を目的としていましたが、各授業の前後のつながりが希薄で、

生徒の学びが深まらない状態でした。そこで各学年のゴールを具体化し、その達成に向けて毎授業の活動を系統化し、スモールステップで調査・探究を積み重ねるプログラムにしました」

25年度からの1年次の「自己探究」は、年度末のゴールを「6000字の自己PR文の作成」に設定。「キャリアナビ」（※1）のワークを活用し、自分の関心や得意なことを追究したり、身の回りや社会への関心事から学問・職業を考えたりする活動に取り組む。そうして自己理解を深めながら、生徒個々に強みがあることに気づけるように各授業のプログラムを構成したと、25年度1学年主任の札木理先生は語る。

「自己PR文を構成する要素を集めるというイメージで年間の指導計画を立て、生徒にも授業の見通しを示しています。ゴールが明確

学校概要

設立 1974（昭和49）年 形態 全日制／総合学
科／共学 生徒数 1学年約120人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、筑波技術大に1人が合格。私立大は、立命館大、大阪青山大、大阪学院大、大阪国際大、大手前大、神戸松蔭大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学44人。就職40人。



就職主担
札木 理
ふだき・おさむ
同校に赴任して3年目。理科（生物）。
25年度1学年主任。



進路指導主事
吉田 拓郎
よしだ・たくろう
同校に赴任して7年目。理科（化学）。

になり、各授業がそのゴールにつながるものであると理解した生徒は、一つひとつの授業にしっかりと取り組むようになりました」

2年次は、1年次に見いだした自分の関心や強みがどの分野でどのように生かせるのかという課題に向き合い、将来を具体的に描く

お勧めの分掌・

管理職

教務担当

進路担当

担任

*1 ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。

*2 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

図1 進路指導のキャッチコピー



同校の略称を含めた「やるやん! みのひが」を進路指導のキャッチコピーに（図1）。「みのひが」の1文字1文字を進路指導のステップとして示し、それを基に探究学習の流れも構築した（図2）。そして、教師は生徒ができたことを「やるやん!」と認めるという姿勢で生徒の探究学習を支援している（図3）。
※学校資料をそのまま掲載。

図2 探究学習の3年間の流れ（2026年度）

学年	1年次	2年次	3年次
目的	自己探究	進路探究	進路実現
ねらい	自己理解・自身の強みの探究	自分の関心・強みを生かせる分野の探究	希望進路の実現に向けた探究
主な活動	自己理解、学問理解、社会理解、外部講演	大学、専門学校、企業等の講演会（十数回）、進路先探し	【4～9月】進学希望者：志望校研究、志望理由書作成、面接練習／就職希望者：企業研究、面接練習、学科試験対策 【10～1月（予定）】地域課題に取り組み、その成果を発表
ゴール	自己PR文（600字）	進路目標の決定	進路決定

図3 ワークの趣旨と教師の支援

	個人ワーク	ペアワーク	グループワーク
ワークの趣旨	自分で考え、それを言語化する	自分の考えを他者と共有し、視野を広げる	グループやクラスで考えを共有して、つながる
教師の支援	生徒の取り組む姿勢や記述をその場で認め、褒める	生徒間の対話が難しい場合、机間指導で声かけ	生徒のよい記述を教師が取り上げ、全体に伝える

※図2・3ともに学校資料を基に編集部で作成。

ための「進路探究」に取り組む。そのゴールは年度末の進路希望調査で自分の希望進路が書けることだ。授業では十数回にわたって大学や専門学校、企業などから講師を招き、学問や仕事への見聞を広める。そして自らも調査を重ね、人生観や仕事観を深めていく。

そして3年次は、2年次までに深めてきた自己のあり方・生き方を踏まえて「進路実現」に向けて動き出す。進学希望者は志望校研究や志望理由書の作成などに、就職希望者は企業研究や面接練習などに取り組む。

できたことをすかさず褒め、前向きに取り組む意欲につなげる

生徒の学びを支えるのが、「やるやん! みのひが」に基づく教師のポジティブな声かけだ。例えば授業中、教師は教室を回り、真剣にワークに取り組んでいた、自分の言葉で考えを書いていた生徒をすかさず「やるやん!」と褒める。教師から肯定されることは、生徒にとって「これでいいんだ。次も頑張ろう」といった原動力になっている。

「教科の授業以上に協働の機会が多く、正解が1つではないことに取り組む探究学習では、どんなに小さくてもできている点を褒め、生徒が成功体験を積み重ねられるように心がけています。そうする中で、生徒には『希望進路を諦めなくてもいいんだ』『いろいろな挑戦したい』などと自信を持つてほしいと思っています」（吉田先生）

同校の探究学習は個人での調査を起点とし、調査の結果をペアやグループで共有して自分の考えを深めるプロセスを大切にしている（図3）。他者とかかわることが苦手など、多様な背景を持つ生徒がいるため、教師は柔軟な支援を心がけている。

「個人ワークだけでは生徒の世界は広がりにませんが、かといって協働を無理強いしたくはありません。生徒間の対話が難しい場合は、教師が生徒の対話の相手になったり、生徒が書いた内容を教師が見取り、『こんなことを書いている人がいてすごいと思った』などと教室全体に紹介したりしています」（札木先生）

そうした刷新を受け、多くの生徒が自己理解を深めた上で1年次の自己PR文を書いた。自ら進路指導室を訪れたり、オープンキャンパスに参加したりと、主体的に進路を考える生徒も増えてきている。そして26年度、2年次の基礎力診断テスト（*2）では、1年次よりも自己肯定感が高まるという結果も得られた。

26年度は3年次の探究学習の刷新を進めている。大半の生徒の進路が決定する10月以降に、地域課題を題材にした探究学習に取り組む、その成果発表会を12月に行う予定だ。

「限られた時間でも地域の課題を探究する経験を通じて地域貢献への意識を高め、他者と協働する力をさらに磨いて本校を巣立ってほしいと願っています。発表会には地域の方々を招待する予定です。校外の人の前で発表する経験が生徒の『やるやん!』につながることを期待しています」（吉田先生）

Web VIEWnext ONLINE

関連記事はこちら!

箕面東高校が取り組む、生徒の力を引き出す支援の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。次の関連記事のタイトルをクリックしてアクセスしてください。▶「大阪府・エンバワメントスクール『基礎力診断テスト』合同分析会『生徒の力を引き出す学校』として、生徒を支援するためにできることを、学校を超えて共有する」